☆帝国主義国、後進国、「労働者国家」
三ブロック階級闘争を
世界プロ独一世界共産主義の勝利へ！
共産主義者同盟

12月18日
第250号
編集発行人
井村和夫
1部 50円

戦旗

戦旗社
中央戦旗社 TEL 03 (901) 1215
東京都中央郵便局本所分局私書箱 号
振替番号 番
神奈川支局 044 (53) 7650
千葉支局 0474 (72) 3230
愛知支局 052 (261) 6075
京都支局 075 (701) 0025
大阪支局 06 (921) 1457

国際主義を洗い流す日向一派を粉砕し

12・18共産同中央政治集に結集せよ！

非合法軍事組織の敵対物

解党主義——日向一派を放逐せよ！

スターリン主義打倒！反スターリン主義を粉砕し、革命的マルクス・レーニン主義を復権させよ！共産主義者同盟中央政治局

共産同の革命的伝統を蹂躙しつづけ自己の右翼路線を正当化するため、党の公的機関を解体させようとした日向一派は、指導部から放逐された。

革命的労働者の新聞「戦旗」はよみがえった。

軍事委員会、共産同出版部（R・C）を始めとする同盟の全ての機関、能力日向一派の合法主義的党運営のために日陰者の位置においやられてきた非合法組織は、非合法党の中核として、しかるべき位置に復帰した。

多くの地方、地区の同盟組織は政治局一中央委員会の下への結集を表明し、未だ日向一派の占拠する地区へは再建のための具体的計画が開始された。

共産同は革命的左翼を結集しつつ単一党の建設へその回歩を進めた。両合プランの分解過程は、一層広い基盤に於ける「イデオロギー的純化を斗いとる」はげしい党派斗争と「統合」の過程によってかわらねばならぬ。

八派を解体し、単一党の下へ統合する過程は、その主要な世界党建設の党派斗争である。共産同は、世界の革命的左翼を推進する世界プロ独一世界革命戦争を実現する世界党一世界赤軍の下へ糾合するための壮大な旗へ旅立っている。その長旅の妨害者は日向一派の如く旗の様な党内斗争の前に葬り去られるであろう。

＜日向一派はなぜ解党主義に転落したか＞

日向一派は第二次ブンドの歴史的遺産に根据をもつ、ブンド主義の反革命集団II革マルへの政治的屈服と、「反スタ」学者マルクス主義への イデオロギ的従属を特質とする、合法主義、党の中枢たる非合法軍事組織の解体を要求する解党主義集団である。

第一に、彼等は世界同時革命戦略と世界革命戦争—世界単一のプロ独に発展してきたブンドの国際主義の伝統を流い捨し、世界一国同時革命路線と日本革命戦略という定式化を行って、事実上の一国主義に転落している。社会主義社会が全世界的規模に於てのみ実現し、プロ独権力の性格規定はその死滅を見通しておかねばならないという革命的左翼の自覚の前提をさも大発見の如く騒ぎたて、同時革命をこれらの「二段」や「本質」や「論」の中にだけとじこめている日向は、世界同時革命戦略がもっている国際的党派斗争の地平と全く無縁な存在になり果てている。世界革命戦争—世界プロ独という我々の綱領的提起は、論理主義的な結論であったり、一国プロ独一世界プロ独という革命の見取図の問題を論じているのでもない。60年初頭からの帝国主義支配の再編過程を直接の契機としながら、数百年にわたる被抑圧民族としての搾取と収奪に対する歴史的自覚をバネとして、同時に先進国プロレタリアートへの不満、先進的労働者国家のスターリン主義的変質に対する自己自覚を孕んで進行している後進国の革命戦争の荒波—それは「国境をこえる革命」あるいは戦時樹立化としての「自力更生」として自己を表現している——に対し、支持と獲得の立場を表明しながら、その斗いがもつ民族主義的傾向と斗いぬく解放という場を一層発展させる共産同の革命的伝統を蹂躙し、ブロレタリアートにとって唯一の本質的感応たる人間労働を軸とし、経哲草稿におけるヘーゲル弁証法ならびに哲学一般の批判」と「フォイエルバッハテーゼ」を明らかにして、哲学と決別し、共産主義同盟の設立と改治的実践の道へ、そしてその実践の根据を実証するための資本論の執筆に入り、その成果は「ゴータ綱領批判」として「宣言」を二段階発展させたプロレタリア運動の綱領を定在として確立したという苦斗の歴史とは全く無縁な体系化である。日向は、革命的実践の問題を対象認識の利害性とますりかえ、（ここまでは革命的実践から逃亡した多くの学者の常套手段）更には対象認識の内容の問題を認識の形式にすりかえることによって、常とう無けいな体系をつくりあげた。日本における主体的唯物論者のスターリン哲学との苦斗は、人間実践の解明をめざす問題としてあった。しかし、人間実践を労働として設定し、あるいは革命的実践と設定しても、いずれも唯一の本質的感応たる人間労働を軸として

世界プロ独の綱領的諸問題

世界革命戦争——世界単一のプロ独を実現する世界党——世界赤軍を全世界武装闘争の最前線に建設せよ！

綱領問題と党内斗争における綱領問題

一、党内斗争における綱領問題

「現実の運動の一歩一歩は、一ダースの綱領よりも重要です」——マルクスのこの言葉はいうまでもなく、ドイツ独のラサール派との原則におけるかけひきを戒めたものであり、決していわゆる「階級形成党派」を擁護していわれたのではない。したがって、そのさ後にこのようにいわれている。「原則綱領をつくることはいま一歩運動の水準をはるかな境界標をうちたてることになります」（ラッサールへの手紙）

しかるに、今日の「運動」このものの「党派」、すなわち、かつて同盟の招請した「8・3国際会議」に結集したいわゆる「第三潮流」あるいは同盟内中核派を軸に形成された「反官僚一戦線」の諸党派が、国際反革命の前にその無力をさらけだした過去の手工業性をぬぐ去って単一労働党をかちとらねばならぬ」と——その闘いの途上で、次第に明らかになりつつある「反スタ諸派」の共産主義者と反スターリニストへの分裂のはじまりに対して、雑炊的「反スタ」を克服した共産主義の旗印が鮮明にうちたてられねばならぬことは——これらの諸党派が昨秋「世界を組織する党」をめざした時から目下、問われていたことであった。赤軍派に対して「党」を主張し闘った同盟が、「統一戦線」や「バルチザン」に党の任務を解消せんとする情況、叛旗派の放逐した今日、断ったにしても地平こそ相力（プロ独）回帰と経起の全構造を目のうちに有する非合法党建設への一切の力の集中に外ならない。

今日までの宮内闘争を共に闘ってきた同盟は、この問題を、「党」の問題として、

わが同盟の過渡期世界論総括

その(1)

一向過渡期世界論総括

〈一向過渡期世界論の果した歴史的役割〉

いわゆる一向過渡期世界論「我々の立脚すべき地点」がマル戦派との党内闘争の遂行の過程で提起され、共産同七回大会の基調をかたちづくったことは共産主義者同盟員なら誰も否定することのできない事実である。マル戦派のトロツキー主義に依拠した永続革命論に対して同盟革命論を、一国党建設に対して世界党建設を、国際金融資本・国内資本主義の侵略に対して、帝国主義の侵略・反革命に争をめぐった国際階級闘争を、金融的倍率・超帝国主義論に対して、帝国主義の不均等発展・市場再分割戦を、左翼統一戦線・下からの党建設に対して、職党統一地区党としての中央集権党建設を対置した一向過渡期世界論が、例えその完成的展望を根拠規定論にもたつたとしても、10・8・11・12の闘争を発展段階として、エンプラ、三里塚、王子闘争に至るブハ標榜マル戦派を解体させ、7回大会の基調をなしたのは全く誤然のことであつたのだ。

マル戦派はもとより、当時の革命的左翼諸党派がベトナム革命戦争の意義を何ら明確化できなかつたのに対し、一向過渡期世界論の場合はるかに実践的に過渡期世界論の構造はるかに実践的に過渡期世界論の場合はるかに実践的に世界党建設の指標を提起していたのであり、またその世界党一世界同時革命の提起自身、第一次ブンドの第五インター、帝国主義とスターリン主義との同時対抗論を継承することによつて、第共同盟の「帝国主義との相互依存と相互反発」なる二元論的世界観＝体制側労働者論との対決姿を打出して待っていた。世界プロ独裁党一世界革命戦争の展望の下に大衆闘争の広汎な大衆への支持、軍事警備の広汎な大衆への支持、軍事警備軍事・政治闘争にたちまち、今迄の世界党一地区党の指揮権、戦闘員は三角軍（すなわち工場労働者、農民、左派の広汎な大衆への支持、軍事警備軍事・政治闘争）にたちまち、軍隊の武装化は三組合に参加して、いずれも階級闘争の鍛錬を受け、大衆と緊密に結びつき、軍隊の思想の革命化をうながし、人民のために新らしい功績をたてた。これはまだ、戦争への最大の傾倒であり、革命的敗北主義の反戦、労働者の反戦、労働者の反戦、労働者

八派「ソビエト派」解体

共産主義者同盟

同盟十年の総括をかけて日向一派を解体放逐せよ！

関西地方委員会 アピール

全国の同志諸君！「戦旗」購読者諸君！

わが同盟十年の栄光を海行く秋欧保共戦において、軍事を組織する党として「党の革命」の第一歩を踏み出したわれわれは、第二次ブントの否定的産物たる分派ソビエト主義者＝叛旗・情況派を解体し、いまや、日本の革命的左翼内部に集食してきた右翼日和見主義集団＝革マル派――かれらは、十・八闘争以来、一切の武装闘争に敵対することによって、反革命集団へと転落し、名実ともに、スターリニストの補完物たる反スター主義者の正体を暴露したのであるが――に断腹し、口先だけで軍事を唱える軍事反対派＝ソビエト主義へと自己を純化しつつある日向一派を、同盟から放逐することによって、「党の革命」の劇的な一段階を終えつつあることを、ここに明らかにしておきたい。

しかり、日向一派の放逐を解体のための闘争は、同盟十年の歴史の総括であり、反スターリン主義として登場した新左翼総体を止揚し、真にスターリン主義を打倒しうる第一の非合法党建設のための闘争であって、「党の革命」とは「武装せる非合法党」建設の編綜を獲得することに始まるものとしてこそ、現代無政府主義者＝赤軍派との分派闘争と、昨秋以来の武装闘争、政治警察との熾烈な攻防の中で、真赤なブントの血であがなって到達した確信である。これこそ、第二次ブントを「清算」するのではなく、真に止揚しうるために、最低限、共通の到達地平として確認されねばならぬ。ここからロードスだ、ここで跳べ！

しかるに、昨秋武装闘争において敵前逃亡したRO脱走分子を中核とする日向一派は、第二次ブントを綱領するために、われわれが固く固く誓りしめなければならないところのこの理念、放棄し、「革命論メソッド」なる方法論体系を対置して自らを合理化し地点で